

二〇一四年度 一般二月入学試験

国 語

〔注意事項〕

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は31ページ、解答用紙はマーク・シート1枚です。監督者の指示に従って確認しなさい。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
4. マークは、マーク・シートに記載してある「記入上の注意」をよく読んだうえで、正しくマークしなさい。
5. 受験番号及び氏名は、マーク・シートの所定欄に正確に記入し、また受験番号欄の番号を正しくマークしなさい。
6. 監督者の指示があつてから、マーク・シートの左上部にある「科目欄」に受験する科目名を記入しなさい。
7. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

国語

(60分) 100点 (解答番号)

1

44

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

私は道路をワタリ、ガラス戸ごしに家の中を覗いてみた。ウス暗い屋内はまるでそのすべてが骨董品のように感じられるほど古びており、営業をやっているとは思えなかった。だが目が暗闇にナレてみるとそこには陳列ケースがあり、その中の棚の上に三個の置き時計と安物の腕時計が間延びした余白の中で整然と並んでいる。私はその中の赤いプラスチックの置き時計に気持ち(4)をそそられた。年代もので動くかどうかあやしい感じがあるが、友人の子供が目覚まし時計が欲しいと言っていたことをふと思い出したのである。

まだバスの時間には十五分ほど間があるのを確認してガラス戸の取っ手を引いた。足を踏み入れると店の中は何年も開けていない古いタンスのような匂いがした。同時に不意に時間を刻む時計の音が聞こえてくる。音のする方を見ると店の横壁に大きな柱時計が掛かっており、丸い金色の振り子がゆつくりと左右に動いている。吉見の駅を降りたつてそのときはじめて時間が動きはじめたように感じられた。

目当ての赤い目覚まし時計は動いていなかった。そのプラスチックの色やけ具合やデザインからそれは少なくとも二十年は経っているように見受けられる。ここが骨董屋でないということは、目覚まし時計は二十年間同じ場所にありながら誰にも持つて行かれなかったということになる。

一体そんなことが起きうるものかとケースを覗き込んでいると物音がした。八十歳くらいになろうかと思える老婆が奥の暗がりから出てきて、
(6) 私の顔を見ている。察するに、おそろしく久方ぶりの客なのだろう。

「……この時計はまだ動きますか」

老婆の不意をついた登場に挨拶を忘れそう言った。

「……どうですかのう」

老婆はもうしわけなさそうに小首を傾げたまま時計を眺めており、ゼンマイを巻いて試す気配もなかった。

「かなり古い時計ですね」

「ヨシハルが小学校に行っていたころからありますからね」

「ヨシハルさんって？」

「孫ですよ。大学を卒業して大阪の方でシユウ職しておりますが、最近結婚することになりましたね」

「そうするとそろそろひ孫さんの顔が拝めるといわけですか」

「まあそこまで生きていますやら」

話は時計の方から少し遠ざかり、私はバスの時間になりはじめていた。

⁽¹⁰⁾「この時計動くのですかねえ」

話を元にもどすが老人はまた元のように「さあ」といって小首を傾げるばかりである。そのとき店内の人声を聞きつけたのか、店の奥からもう一人の老人が出てきた。額に二匹のドジョウを這わせたような太い眉毛の老人で、どうやらこの店の主人らしかった。私の顔を見るなり初対面なのに

(11)

満面こぼれ落ちるような笑みを浮かべている。

「ご旅行ですか。こんなところあまり見るもんありませんでしょう。あなたのような若い方には退屈でしょう」

「いや僕はもう五十八ですから若くないですよ」

「五十八歳？ そりやお若い。人生今からです。私なんか九十七ですからね。そろそろお迎えが来てもおかしくはない。その時

が来たら、あの柱時計を棺桶代わり(12)にしてくれと家内には言つとるんですよ、ハッハッハ」

「ほう、柱時計の棺桶ですか。それは面白い」

「でしょ。あなたさんは話の分かる方だ。家内はそんなことしたら恥ずかしゅうて親戚に顔向けが出来んなんて言うてるんですが、この時計はお前より俺と一緒にいた年月が長いんだから恥ずかしいなんて言うて罰が当たるぞと言ひ聞かせてるんですわ」

私は内心⁽¹³⁾アセっていた。

柱時計を見るとバスの時間にはもう六、七分を余すばかりとなっている。私は話の流れを断ち切り、ケースの中の時計を指さす。

「これは売り物ですか？」

「売れと言えば売らないわけにはいかんでしょなあ」

主人は思案げに言う。

「二十年以上前のものやから、壊れても部品がありますかいなあ」

⁽¹⁴⁾「まあ飾り物と思えば別に動かなくてもいいですがね。いくらくらいお支払いすれば……」
切り出す、老夫婦はただ笑っているばかりである。

バスの時間まで五分を切る。

「二千円くらいでいかがでしょうか」と客の私の方が値を切り出す。

老夫婦は黙って笑ったままなので、少し安く言い過ぎて失礼だったかと思っていると主人は言いにくそうに「じゃあ千五百円いただいときますかろう」と言う。いやそれは悪いと二千円と千五百円をはさむ⁽¹⁵⁾奇妙な押し問答があり、その間も時間が過ぎて行く。

結局私が折れて千五百円で譲っていたことになる。

「もうしわけありませんのう。こんなもん」と言う奥さんの丁寧な包装に取りかかる気配を察知し、急ぎですから私はそれを

竹輪の入っているビニール袋に入れ挨拶をして店を出た。

吉母（注）行きのバスに危うく間に合い、車が走り始めると、しばらくしてバスは国道を逸れ、車窓の風景はのどかな田園へと変わった。その田園の中に忽然とひとかたまりの建て売り住宅が現れる。風景の中に立ち現れる無味乾燥とした郊外型住宅を眺めていると、⁽¹⁶⁾なぜかいましがたの出来事が何年も前の遠い幻のように思われた。あの、世の中から置き忘れられたような老夫婦の時間と現実の時間が重なり合わなかったのだ。私は小さな赤い置き時計をビニール袋の上から触れてみる。そこには時計の確かな手触りがあった。時計の感触を確かめながら、その時ふと赤い置き時計が消え去った陳列ケースの景観のことが思い出される。老主人が時計を取り出すと、たった一つの時計が消えたというそのことだけで、ケースの中の景観は歯が抜けたように寂しいものになったのだ。その時なぜか私は⁽¹⁷⁾わずかな罪悪感を覚え一瞬戸惑った。老夫婦が長年馴染んできた家の風景を、行きずりの旅行者の小さな欲望が変えてしまった。そんな気がしたのだ。しかし迫り来るバスの時間は小さな逡巡をすみやかに消し去った。

バスは二十分ほどで吉母の集落に入った。

乗客は四、五人ほどで、集落に入るすぐ手前の停留所で私の斜め前に座っていた横顔の端正な中年女性が席を立てて降りた。私はそのことに手元の時計と同じように気持ち悪く奪われていた。私がかねがね土地の風景は女性の顔立ちに現れると思っており、その女性の横顔を見たとき吉母に期待を膨らませていたのだ。そんなことを考えている矢先、とつぜん車窓の向こうに青い海が広がる。

バスを降り、海沿いの道を歩き、浜に出る。

両側に岬を⁽¹⁸⁾いただいた浜は北の岬から南の岬に向かったおやかなカーブを描き、端麗な入江を形作っている。海は静かで午後の斜光が水面に光の幕を張り眩しい。

浜に座り砂を掬う。

肌理きめの細やかな白い砂だった。

砂に触れていると、ふとあの女性の横顔が思い出された。

そしてやがてその女性の横顔は昔の母の顔にゆつくりと二重写しになる。

私はビニール袋の中から時計を取り出す。

ゼンマイを巻くとコッキンコッキンとクラシクな音がした。それは「時間」という名の曲を奏でるソロ演奏のようだった。

私は目覚まし時計を眩しい海にかざしながら、秒針の小さなダンスを眺めていた。

(藤原新也『なにも願わない手を合わせる』による)

(注1) 振り子——ぜんまい時計と異なつて、柱時計の振り子はその速度を一振りで一秒に制御する。その際に聞こえる音は現代の電動式時計では聞こえない

(注2) 吉母——下関市響灘に面した集落

問1 傍線番号(1)・(2)・(3)・(9)・(13)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

1

5

(1)

ワタリ

1

- ① 壁をペンキでト装する
- ② おもわずト息がもれる
- ③ 南蛮ト来の珍しい産品
- ④ ト弟関係で技術を継承する
- ⑤ 違法なト博を摘発する

(2)

ウス暗い

2

- ① ハク氷を履むふ思い
- ② ハク来品の万年筆
- ③ 実力がハク仲する
- ④ 彼はハク学である
- ⑤ ホテルに宿ハクする

(3)

ナれて

3

- ① カン略に説明する
- ② 従来のカン行を破る
- ③ 新入生をカン迎する
- ④ 不正をカン過する
- ⑤ カン静な住宅街

(9)

シユウ職

4

- ① 報シユウを受け取る
- ② 疑いを一シユウする
- ③ シユウ聞が広まる
- ④ 去シユウが取りざたされる
- ⑤ 従来の方針を踏シユウする

(13)

アセって

5

- ① ショウ燥感に駆られる
- ② 宛名に敬ショウをつける
- ③ 事件が暗ショウに乗り上げる
- ④ 三位までを表ショウする
- ⑤ 早寝早起きをショウ励する

問2 傍線番号(4)・(7)・(8)・(14)・(18)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

6

10

(4) 気持ちをそそられた

6

- ① 親近感を覚えた
- ② 興味がわいた
- ③ やや失望した
- ④ 奇妙な感じを抱いた
- ⑤ 記憶をよみがえらせた

(7) 不意をついた

7

- ① 驚かすような
- ② 不用意な
- ③ 突然の
- ④ 間をおかず
- ⑤ 不自然な

(8) 小首を傾げたまま

8

- ① うなだれて考え込んだまま
- ② 困惑して落ち着かないまま
- ③ よくわからないという様子のまま
- ④ 客に対して不審げな態度のまま
- ⑤ すまなさそうなふりをしたまま

(14) 切り出す

9

- ① 思い切つて尋ねる
- ② 話をうち切る
- ③ 話題を変える
- ④ 余計な口をはさむ
- ⑤ 用件を言い始める

(18) 岬をいただいた

10

- ① 岬がよく見える
- ② 美しい岬が近くにある
- ③ 岬を囲むようにある
- ④ 見上げる位置に岬がある
- ⑤ 自然の恩恵として岬がある

問3 傍線番号(5)「はじめて時間が動きはじめたように感じられた」とあるが、その理由として、最も適切なものを、次の①～

⑤の中から一つ選びマークしなさい。

11

- ① 営業しているとは思えない古びた店の中に立派な柱時計があり、それが正確に動いているのに気づいたから
- ② ひっそりとした町の静かな店の中で、振り子の音が不意に、時間の動きそのもののようにはつきりと聞こえたから
- ③ 音がしないデジタル時計になじんできたので、珍しいゼンマイ仕掛けの時計の音に違和感を感じたから
- ④ 吉見の駅からの町ののにぎやかさに比べて、古びた店内の様子がまるで時間が止まったように静かだったから
- ⑤ 吉見の駅を降りたつてからずっとさびれた町並みが続き、時計の音にようやく店らしい活気を感じたから

問4 空欄番号

(6)

(11)

しなさい。 12 に入る語句の組み合わせとして、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマーク

- ① そわそわと忙しそうに (11) 孫のように思ったのか
- ② おずおずと恥ずかしそうに (11) 妙になれなれしく
- ③ いかにも大儀そうに (11) 詮索がましい目つきで
- ④ ちよつと驚いたように (11) 知己の人と出会ったように
- ⑤ じつと不審げに (11) やや身構えるように

問5 傍線番号⑩「この時計動くのですかねえ」とあるが、このような尋ね方をした「私」の気持ちとして、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

13

- ① いくら古びた時計店とはいえ、動くと思えないような時計を売るとは信じられない
- ② 友人の子供が目覚まし時計を欲しがっていたから、ぜひこの時計を土産にしたい
- ③ 老婆の話をさえぎることは申し訳ないが、早くこの時計が動くのかどうかを確かめたい
- ④ この時計はかなりの値打ちの骨董品らしいので、もし動くのならばぜひ買いたい
- ⑤ この時計にまつわる家族の話をもっと聞きたいが、急いでいるので残念だ

問6 傍線番号⑫「あの柱時計を棺桶代わりにしてくれ」と言う店の主人の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

14

- ① 長い人生とともに過ごしてきた柱時計を残して、まもなく死んでいく寂しさをしみじみとうち明けている
- ② 古びた柱時計が年代ものの貴重な骨董品であることをほめめかし、高価なものであることを暗示している
- ③ 柱時計を棺桶にすることに反対する家内を、話のわかる客が説得してくれるように訴えている
- ④ 時計に関わって生きてきた年月の長さや、常にそばにあった柱時計への愛着を、ユーモアを交えて表している
- ⑤ 時代に取り残された店や古い時計とともに、自分も潔く消えていこうという覚悟を決めている

問7 傍線番号(15)「奇妙な押し問答」とは、どのような気持ちでの「押し問答」か。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

15

- ① 目覚まし時計を何とか手に入れようとする旅客と、思い出の時計を売ってしまうのが残念な店主との押し問答
- ② 動くかどうかわからない時計を少しでも高値で買おうとする客と、その値段で売るのは気が引ける店主との押し問答
- ③ 目覚まし時計の値段を自分でさっさと決めてしまいたい客と、なかなか値段を決めようとしぬ店主との押し問答
- ④ バスの時間が気になって早く目覚まし時計を買って帰りたい客と、もつといろいろな話をしていた店主との押し問答
- ⑤ 古びた旧式の時計をなんとか手に入れた客と、売るのが惜しくなってわざとじらしている店主との押し問答

問8 傍線番号(16)「なぜかいましたがたの出来事が何年も前の遠い幻のように思われた」とあるが、その理由として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

16

- ① 無味乾燥な建て売り住宅とは対照的に、古びた時計店のたたずまいのほうが、「私」には強く印象づけられたから
- ② 古びて目立たない時計店の雰囲気と比較して、建て売りの郊外型住宅があまりに現代風で人目を引いたから
- ③ 現代風の建て売り住宅の集まりに対して、一軒の古びた時計店が消えてしまいそうなほど孤立していたから
- ④ 現代風の建て売り住宅と比較して、時計店や老夫婦の様子は、時が止まったままのようで現実感がなかったから
- ⑤ のどかな田園風景や古びた時計店に比較して、建て売り住宅の集まりがあまりに無味乾燥で非現実的な印象だから

問9 傍線番号(17)「わずかな罪悪感を覚え一瞬戸惑った」とあるが、どのような「罪悪感」か。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

17

- ① 自分が古い時計を欲しがったばかりに、老夫婦が長年馴染んできた風景を物足りないものに変えてしまった
- ② 貴重な骨董品を自分が無理に買ってしまったことで、古びた店の陳列ケースに良い品物がなくなってしまった
- ③ 大切にしていた思い出の時計がなくなったことで、老夫婦がさらに世間から忘れられた存在になった
- ④ バスの時間が気になって、店の主人との話を打ち切ってしまう、老夫婦をがっかりさせてしまった気がした
- ⑤ 陳列ケースから時計を一つ取り出すと、歯が抜けたように空白が生まれ、店の風景を間延びしたものにした

問10 最後の場面の、吉母の浜で時計を眺める筆者の思いとして、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

18

- ① 古びた静かな店で友人の子供の土産にしようと思つて目覚まし時計を買つたものの、デジタルの時代には珍しいゼンマイ仕掛けが思いのほか面白くて、その音や動きに興味が尽きず、いつまでも眺めていたいという思い
- ② 店の主人と何度も交渉を重ねて、貴重な骨董品である目覚まし時計をようやく手に入れ、その音の素晴らしさやゼンマイ仕掛けの仕組みの精妙さなどのできばえに、心の底からしみじみと感動する思い
- ③ 時間が止まったような老夫婦の静かな生活に触れ、浜辺で母の面影を思い出し、秒針の音や動きを感じると、時間が目に見え耳に聞こえるかのように刻まれていた時代への懐かしさがこみ上げてくるような少し幸福な思い
- ④ 土産の時計をバスの時刻になんとか間に合うように手に入れ、母の面影にも似た女性にも出会うことができ、また、吉母が期待したとおりのすばらしい場所であつたのがうれしく、ほっと満足する思い
- ⑤ 浜辺で美しい自然の景観を満喫しつつ、砂浜で母の面影を思い出しながら、目覚まし時計の秒針の動きや音に触れてみると、無味乾燥な現代の憂さを忘れ、失われた古き時代の良さを再確認する思い

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

心を「内側」と表現することは、本来、比喩に他ならない。内側とは、何かに囲まれた空間的な内部のことを意味するはずであるが、心がそうした何かの内部空間に収まっているのではないからである。だが、この比喩は強力であり、この表現を使わずに人間の心理について語るのには難しいほどである。

心を内なるものと捉える傾向が強いのは、ひとつには、現代では多くの人が、「心は脳にある」と考えているからであろう。心理学や認知科学でもそう想定されているがゆえに、「内部表象」^(注1)といった表現が使われるのである。たしかに脳は、(通常の状況と状態では)外側からは見えない身体の内側にあり、ここから、「心が脳にあるのなら、それは身体の内側にある」と考えるのは自然である。しかし、心を内面とか内側とか呼ぶおもな理由は、「心＝脳が身体の内側にある」と考えたからではないだろう。すくなくとも、⁽¹⁾それは派生的・補強的な理由ではないだろうか。むしろその逆に、「心は内側にある」という考えをもっていたからこそ、「それは脳なり心臓なり、身体の内側にあるのだろう」という発想につながったのではないだろうか。

普通の意味で「内側」といえば、他人からの視線が遮られる衝立^(注2)や壁や扉のこちら側のことである。それは、壁の内側であり、部屋の内側であり、⁽²⁾フクの内側のことである。逆に、外側とは、その障壁の外側、すなわち、他人の視線に晒^(注3)される側のことである。内側と外側は (3) 関係にあり、一方がなければ他方はない。したがって、心を内面と呼ぶことは、他人の視線から遮蔽されていること、つまり他人には隠されていることを意味している。

しかしながら、心は、内臓のように身体の内側にあるから、他人から隠されているのだろうか。心臓や脳のような臓器は、皮膚や筋肉の奥に位置しているとはいえ、それは外部の観察者から原理的に見えないものではない。⁽⁴⁾カン者の身体を切り開いている外科医は、毎日のようにそれらを観察していることだろう。これに対して、心は身体のなかを開ければ見えるようなものではない。頭蓋骨を開いても、そのなかには脳しか見当たらず、心を見出す^(注4)ことはない。生理学者も、脳のある箇所の興奮を見つめることはできても、「痛み」を見つめることはあるまい。そもそも心なる物(心という実体)は、どこを探しても見当たらない

のである。

ここからあきらかなように、心が隠されたものであるという私たちのイメージは、空間関係を起源にしているのではない。それは、(6) 隠されているからこそ、内側なのである。心とは内面のことであると考ええることは、心を他人に隠されたものと定義づけることなのである。

では、内側や内面と対立関係にあり、それらを規定してもいる外側・外面とは何であろうか。それは、あきらかに、他人から見える私のふるまい、他人から観察可能な私の行動のことを指すはずである。この行動には、表情や小さなしぐさのような⁽⁷⁾細かなふるまいも含まれる。

だが、他人からも観察可能な私のふるまいは、私の心理状態とは別のものなのだろうか。それは奇妙な考えであろう。私たちは多くの場合、率直に喜びを顔や動作に表す。何かとくに制約条件がないかぎり、私たちは思いのままにふるまう。私が、休日に書店に買い物に行くのは、まさに私の意図したところである。私の意図は、いま、書店に向かつて歩いている行動そのものなかに表現されている。いや、この「表れている」「表現されている」という言葉づかいは⁽⁹⁾曲者である。というのも、「表現」という言葉は、表現するものと表現されるものの分離を含意しているからである。私の笑顔は、嬉し^{うれ}さという表現されるべき（内的な）ものを表現している、といったようである。しかし、無邪気な笑顔にそうした表現するものと表現されるものの区別はなく、書店に向かう私の歩みは、書店に行くという私の意図そのものである。

このように、ふるまいがそのままにその人の心理である場合は、数多く存在する。いや、日常言語学派の哲学者、ギルバート・ライルによれば、私たちが、ある人の（自分自身も含めて）心について述べるときには、つねにその人の行動について述べているのである。

ある人がその人自身の心の特性を実際に働かせていると叙述される場合、われわれはその人の外部に現れた行為や実際の発話を「心の」結果として「中略」叙述しているのではなく、むしろ、それらの外部に現れた行為や発話そのものについて叙述し

ているということである。(ライル)

われわれが心的述語述語を用いて人間を記述する場合、われわれは、意識の流れの中に生起する実体のない幽霊のような過程を求めての推論「中略」を行っているわけではなく、むしろ、⁽¹⁰⁾ケン著な公的振舞いを構成するもろもろの部分が統轄される有様を記述しているということである。(同)

私たちは、心を指し示す人格的特徴として、「優しい」とか「愚か」などという言い方(ライルの言う心的述語)をする。そうした場合には、私たちは、あたかも、その人のなかに心なる物(＝実体)が存在していて、その物に「優しい」といった性質が宿っているかのように想定しがちである。ちようど、机という物が、硬いとか茶色といった性質をもっているように。しかし、ライルによれば、心的な特性や能力の基体きたいとしての心こころを想定することは誤りである。私たちが、実際に観察しているのは、ある種の身体的な行動パターンに他ならない(ただし、あらゆる行動パターンが心的であるわけではない。膝蓋腱反射しつがいけんはある種の行動パターンであるが、その人の心理を表すものではない)。身体的行動の背後に、それを表出している基体ないし実体としての心を想定してはならない。

⁽¹²⁾、私たちは、現在、自分の目の前にいる人のふるまいを見て、そこで見聞したことを越えてその先まで立ち入ろうとする。たとえば、⁽¹³⁾ある人の勇敢な行動を見て、その理由やその人の性格について考えるであらうし、そのふるまいが偽りや虚勢ではなく、「本物の」勇敢さであるかを確かめたくなるであらう。しかし、その人の勇敢さの理由を知るとは、勇敢なふるまいをその人にさせた「勇敢な心」という隠れた原因を、その人のどこかに見出すことではないし、観察された行動の背後にまわり込むことでもない。その人の勇敢さの理由を知るとは、そのときのふるまいを、その人の過去のふるまいやそれまでの状況と関連づけ、生活史のなかにそのふるまいを位置づけることに他ならない。

ふるまいからその人の性格を判断することは、その人のもっているある種の能力や傾向性を知ろうとすることである。すなわ

ち、その人は困っている人を見ればつねに勇敢なふるまいをするのか、あるいは、自分の利害や名声などが絡んだ場合にのみ「勇敢な印象を与える」ふるまいをするのか、などを知ることである。よって、何かそのふるまいの原因となるような背後の実体を想定する必要などないのである。

また、私たちは、「意志が弱い」とか「強い」とか、あるいは「決意が堅い」といった表現をしばしば用いる。そうしたとき、心とは何かエネルギーのようなもので、その奔流がある時点で行動を開始させたり、行動が続いているあいだずっと流れ出ていたりするかのような想定をしがちである。しかし、(14)。意志をエネルギーにたとえる考えは、物理学においてエネルギー概念が成立した後に生まれたのであり、歴史的に見れば比較的最近の考えなのである。

たしかに、決意が堅く意志が強い人は、持続的に目的を追求し、自分の仕事を途中で放き⁽¹⁵⁾したり、遅らせたりする誘惑には断固として抵抗する。だからといって、自分の仕事を完遂しようという儀式⁽¹⁶⁾ばった決意を最初にするわけではなく、ましてや、エネルギーを絶えず充填^{じゅうてん}しているわけではない。また、仕事には断続的なものもあるのだから、決意が堅いからといっていつもその仕事にエネルギーを投入しているというわけではない。意志が強いとか、決意が堅いとか言っても、実際に心的なエネルギーに強弱があるのではない。むしろそれは、困難な仕事や気の進まない仕事にあっても、手を抜かず、注意散漫にならず、不平をこぼさないうで仕事を遂行する人のことをいうのであり、それとは逆に、仕事に集中できず、注意が散りやすく、何かと理由をつけては休もうとする人が「意志が弱い」と言われるのである。したがって、意志の強さとは、けっして心的エネルギーの強度のことを言っているのではなく、ある特徴をもった行動パターンやふるまいの傾向性を指しているのである。

〔河野哲也『心』はからだの外にある』による〕

(注1) 内部表象——人間が脳内に保持している、物体や事柄に関する情報であり、物体や事象の認識に利用されているもの。表象とは意識にあらわれる姿・形・イメージのこと。内部表象としては、顔などの形状に關した表象の他、数直線などの概念に關する表象が存在する

(注2) 心的述語——話者の感情・感覚・欲求などの主観的狀態や、対象とする人や物の性質などを述べる語

(注3) 膝蓋腱反射——下肢を曲げ、膝蓋骨(膝のお皿)の下のところを軽くたたくと、筋肉が収縮し、下肢が上がる反射。脚気などの診断などに用いる

問1 傍線番号(1)「それ」の指す内容として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

19

- ① 心を「内側」と表現することは、本来比喩に他ならないからということ
- ② 心を内なるものとする比喩は強力で、使わないのは難しいからということ
- ③ 心理学や認知科学でも心は脳にあると想定されているからということ
- ④ 心は脳にあるものであり、脳は身体の内側にあるからということ
- ⑤ 心は本来内側にあるものであり、それは身体の内側なのだからということ

問2 傍線番号(2)・(4)・(7)・(10)・(15)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

20
～
24

(2)

フク

20

- ① 物語のフク線になっている
- ② 紳士的な態度に敬フクする
- ③ 道路の拡フク工事を行う
- ④ 戦後、日本にフク員する
- ⑤ フク水盆に返らず

(4)

カン者

21

- ① カン急をつける
- ② 人事をカン掌する
- ③ ミスをカン忍してもらう
- ④ 祖母をカン護する
- ⑤ カン部を清潔にする

(7)

ビ細

22

- ① 夜間の警ビを厳しくする
- ② 計画を首ビよく遂行した
- ③ 絵画の審ビ眼を養う
- ④ 彼はビ動だにしない
- ⑤ アレルギー性のビ炎

(10)

ケン著

23

- ① 彼はかなりのケン約家だ
- ② 二つの部署のケン任
- ③ 政治ケン金の規制
- ④ 先ケン隊の到着
- ⑤ 自己ケン示欲の強い人

(15)

放キ

24

- ① オーケストラを指キする
- ② 選挙はキ権すべきでない
- ③ 独身者とキ婚者
- ④ 開戦のキ機を回避する
- ⑤ 国家による徴兵をキ避する

問3 空欄番号

(3)

に入る語句として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

25

- ① 主従の
- ② 相似の
- ③ 相反する
- ④ 相補う
- ⑤ 対抗する

問4

傍線番号(5)「心が隠されたものであるという私たちのイメージは、空間関係を起源にしているのではない」とあるが、筆者がそのように考える理由として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

26

- ① 心は、心臓や脳のように身体の内側にあるのではなく、身体の外側にあることから
- ② 頭蓋骨を切り開いてみても、心が胸ではなく脳にあることを証明できないことから
- ③ 脳のある箇所興奮を見つけられても、痛みを感じる場所を探すことはできないことから
- ④ 心は、他人に隠された内面のことであって、探しても見つかるものではないことから
- ⑤ 心は、内臓のように切り開けば見えるような実体のある物ではないことから

問5 空欄番号

しなさい。

27 (6)

(12)

に入る副詞の組み合わせとして、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマーク

- | | | | | |
|---|-----|------|------|------|
| ① | (6) | 実に | (12) | そもそも |
| ② | (6) | さらに | (12) | もつとも |
| ③ | (6) | もちろん | (12) | やはり |
| ④ | (6) | 要するに | (12) | けっして |
| ⑤ | (6) | まさしく | (12) | たしかに |

問6 傍線番号(8)「他人からも観察可能な私のふるまいは、私の心理状態とは別のものなのだろうか」という問いかけに関して、

ライルはどのように主張しているか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

28

- ① 私たちが、ある人の心について述べるときは、それはその人の外部に現れた行為や発話などの行動とは別のものとして述べるということである
- ② 私たちが、ある人がその心の特性を実際に働かせているという場合、その人の外部に現れた行為や実際の発話を、その人の心の結果として述べているのである
- ③ 私たちが、ある人がその心の特性を実際に働かせていると叙述する場合、ある人の外部に現れた行為や発話そのものについて叙述しているということである
- ④ 私たちが、心理状態を表現する言葉を用いてある人の行動を述べる場合、私たちはその意識の流れの中に生起する実体のない過程を推論していることになる
- ⑤ 私たちが、ある人の人格的特徴を述べる場合、その人のなかにあたかも心なる物が実体として存在していて、そこにある性質があるかのように想定しがちである

問7 傍線番号(9)・(11)・(16)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

29

31

(9) 曲者

29

- ① 重要な認識となるもの
- ② 根拠が疑わしく怪しげなもの
- ③ 不正確で注意すべきもの
- ④ 予想がつかず油断できないもの
- ⑤ 事実を曲解しているもの

(11) 基体としての

30

- ① 性格や特徴が形成される原因としての
- ② 動作や行動の背後にあるパターンとしての
- ③ 特性や能力を育成する方法としての
- ④ 性質や状態の基礎である実体としての
- ⑤ 実験や観察の結果からの想定としての

(16) 儀式ばった

31

- ① ものものしい
- ② ひとつおりの
- ③ 礼儀正しい
- ④ わざとらしい
- ⑤ 格式の高い

問 8 傍線番号(13)「ある人の勇敢な行動を見て、その理由やその人の性格について考える」の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

32

- ① 勇敢な行動をその人の過去や状況とは関連させず、独立したふるまいとして位置づけること
- ② どのような場合に勇敢な行動をとるのかによつて、その人のもっている能力や傾向性を知ろうとすること
- ③ 勇敢な行動が偽りではなく、本物の「勇敢な心」によるものであるかを確かめること
- ④ 勇敢な行動の背後にまわり込んで、「勇敢さ」とは異なる隠された真の原因を見出すこと
- ⑤ ある人の勇敢な行動の原因となるような背後の実体を想定し、分析すること

問 9 空欄番号

(14)

に入る語句として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

33

- ① 心をマグマのようなエネルギーにたとえることは、やはり比喻にすぎない
- ② 心をエネルギー概念としてとらえることは、古くから行われている
- ③ 心をエネルギーの奔流のようにたとえることは、強力な比喻である
- ④ 心を意志や決意などのように弱い、堅いなどと表現するのは容易である
- ⑤ 心をその行動と関連づけて想定することには、どうしても無理がある

問10 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

34

- ① 心とは内面のことであり、心は他人の視線から遮断し、隠さなければならないものであると定義づけられているからである
- ② 外側・外面は、内側や内面と対立関係にあるのではなく、むしろそれらを規定し合う関係にあり、他人から見える私のふるまいや行動のことを指す
- ③ 他人からも観察可能な私たちの行動やふるまいが、私たち自身の意図、心理状態そのままということはほとんどありえないことである
- ④ 心を指し示す人格的特徴を言うとき、私たちが実際に観察しているのは、心なる物の存在ではなく、ある種の身体的な行動パターンに他ならない
- ⑤ 意志の強さとは、ある特徴をもった行動パターンやふるまいの傾向性のことでなく、人間の内にある心的エネルギーの強度を指している

第三問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(20点)

また、この男、ものたよりに、いとさだかにはあらず、なまほきたるものから、さすがに文は取り伝へつべき人をたよりにて、上達部めきたる人のむすめよばひけるを、もしいかならむと思ひつつ見けるを、男、うれしと思ひて、いひかはしけること二度三度ばかりして、のちのちはせざりければ、

身を燃やすことぞわりなき梳く藻火の煙も雲となるを頼みて

とあれど、さらに返しなし。されば、かの男、文伝へける人にあひて、「いかなることを聞こしめしたるにかあらむ」などいひければ、「なでふことにもあらじ。まもりかしづきたてまつりたまへば」といひければ、さもこそはあらめと思ひて、「さらば、よきをりをりに奉らせたまへ」。

さて、文に思ひけることどものかぎり多う書きて、とらせたりければ、「させむ」とて持ていきけれど、また、その返りこともせざりければ、男、また、いひやる。

はき捨つる庭の屑とやつもるらむ見る人もなきわが言の葉は

といひやれど、返りごともせざりければ、また、

秋風のうち吹き返す葛の葉のうらみてもなほうらめしきかな

かくのみいへど、返りごとさらにはせず。あやしさに、いかなるぞ、さだかなるたよりのなきかとして、もとめける。この、文伝ふる人は、もとよりすこしほきたるやうにおぼえければ、とかうもいはで、ねむごろに心に入れて、尋ねければ、「いとものはかなきたよりにつけてありしことなり。その人はさだかにも知らじ。おのらも見しかば、はじめわたりの返りごとはすめりし。その人の、ものへいましぬめりしかば、心には思ひながら、えせぬぞ。みづからは手もいとあし、歌はた知らず。あたら、ことどもを」とぞいひける。いやしからぬ人もさるものこそはありけれ。さて、いふかひなく聞きなしてやみにける。のちに聞きければ、いたつきもなく、人の家刀自にぞなりにける。

(注1) なまほきたるものから——なんとなくぼんやりしているのだが

(注2) 梳く藻火——「梳く藻」はかき集めた藻屑で、燃やしても、なかなか燃え上がらない。「梳く藻火」は、その火のこと

(注3) 尋ねければ——姫君方の女房などの中から別の新しい仲介役を捜し求めたところ

(注4) おのら——私

(注5) いたつきもなく——「いたつき」は苦勞・支障。求婚されたとき、恋文のやりとりなどでじらしたりすることがなかったことをいう

問1 傍線番号(1)・(3)・(5)の口語訳として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

い。

35

37

(1) ものたよりに

35

- ① あるついでに
- ② ある人の手紙に
- ③ ちよつとした文章に
- ④ いつも頼みに思う人をお願いして
- ⑤ 頼れる物を使って

(3) さもこそはあらめと思ひて

36

- ① 姫君のところには男の恋文が届いていないので、すぐには返事をくれないのだろうと残念に思つて
- ② 大切に守られお世話されているような、身分の高い人の姫君なので、すぐには返事をくれないのだろうと納得して
- ③ 仲介役が、姫君は男のよくないうわさを聞いて返事をくれなくなつたというので、そんなことはないと憤慨して
- ④ 仲介役が、姫君に男のことをよく言つておいてくれたので、きっとそのうち返事があるだろうと期待して
- ⑤ 身分の高い人の姫君なので、返事をくれないというような、非常識なことをすることはないだろうと考えて

(5) とかうもいはで

37

- ① 姫君にどんな悪いうわさについても弁解をしないで
- ② 姫君にあれこれと非難するようなことも言わないで
- ③ 仲介役にあれこれと男のことを言わないように頼んで
- ④ 仲介役に姫君を思う気持ちをどうにかして伝えて
- ⑤ 仲介役にあれこれと責めるようなことも言わないで

問2 傍線番号(2)「に」と文法的に同じものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

38

- ① いとさだかにはあらず^{a}}
- ② さらに返しなし^{b}}
- ③ さるもの^{c}}にこそはありけれ
- ④ 人の家刀自にぞなりにける^{d}}
- ⑤ 人の家刀自にぞなりにける^{e}}

問3 傍線番号(4)「させむ」とあるが、この説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

39

- ① 男が仲介役に、姫君に手紙の返事を書いてほしい、と言った
- ② 仲介役が姫君に、男からの手紙をお渡ししましょう、と言った
- ③ 仲介役が男に、姫君の親を説得するべきだ、と言った
- ④ 仲介役が男に、姫君にあなたの手紙を取り次ごう、と言った
- ⑤ 姫君が仲介役に、男に手紙の返事を書こう、と言った

問4 傍線番号(6)・(8)の文法的説明として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

い。 40

・ 41

(6) ありしことなり

40

- ① ラ行変格活用動詞の連用形＋過去の助動詞＋名詞＋断定の助動詞(撥音便) はっおん 十推定の助動詞
- ② ラ行変格活用動詞の終止形＋副助詞＋名詞＋終助詞＋断定の助動詞
- ③ ラ行変格活用動詞の連用形＋過去の助動詞＋名詞＋伝聞の助動詞(撥音便) 十断定の助動詞
- ④ ラ行四段活用動詞の連用形＋完了の助動詞＋名詞＋断定の助動詞(撥音便) 十推定の助動詞
- ⑤ ラ行四段活用動詞の連用形＋完了の助動詞＋名詞＋存在の助動詞(撥音便) 十伝聞の助動詞

(8) いやしからぬ

41

- ① シク活用形容詞の連用形＋完了の助動詞
- ② シク活用形容詞の未然形＋打消の助動詞
- ③ シク活用形容詞の終止形＋格助詞＋完了の助動詞
- ④ ク活用形容詞の終止形＋接続助詞＋打消の助動詞
- ⑤ ク活用形容詞の連体形＋打消の助動詞

問5 傍線番号(7)「あたり、ことどもを」とあるが、この言葉は姫君方のある人のどのような気持ちを表しているのか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

42

- ① 男が姫君以外の女性に心変わりしてしまったので悲嘆に暮れる気持ち
- ② 歌も字も下手でも身分が高ければよいという気持ち
- ③ 姫君になんとか返事を書かせようと必死になる気持ち
- ④ 新しい仲介役として男のために何とかしてやろうと意気込む気持ち
- ⑤ 姫君が字も下手で歌も詠めないのを惜しいと思う気持ち

問6 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

43

- ① 男は仲介役から、送った恋文が捨てられていると聞かされ、「うらみてもなほうらめしきかな」と歌に詠んだ
- ② 男は何度も姫君に恋文を送ったが、姫君は男の詠んだ歌の意味が理解できず、嫌われていると勘違いした
- ③ 男は、姫君の実情を聞き知ってすっかり嫌気がさしてしまい、姫君に求婚をやめてしまった
- ④ 姫君は男のことを内心は恋しく思っていたが、別の人と、たいした恋の駆け引きもなく結婚してしまった
- ⑤ 姫君の両親は男のことが気に入らず、男の恋文が、大切に育てている姫君にわたらないように画策していた

問7 本文の出典である『平中物語』と同じ時代に成立した、同じ歌物語の作品として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

44

- ① 平家物語 ② 今昔物語集 ③ 伊勢物語 ④ 住吉物語 ⑤ 古今著聞集